

建立 400 年のハングル「四面石塔」の謎をさぐる

安房支部 池田恵美子（NPO 法人安房文化遺産フォーラム共同代表）

1. はじめに

高校世界史教諭の愛沢伸雄（当 NPO 代表）は 1990 年代から、足もとの地域にある戦争遺跡や「噫従軍慰安婦」碑などを教材化し、歴教協で発表してきた。なかでも千葉県指定有形文化財の「四面石塔」をめぐるのは、「現代社会における人間と文化～文化交流と国際理解」というテーマで 19 時間授業を実践した。図書室での調べ学習を中心に、生徒自らが学習課題を見出して探求を深め、国際的視野を育むことを学習のねらいとしたという。

今でいうアクティブラーニングの実践として注目され、2001 年に韓国のソウルと晋州で、2002 年には館山で「日韓教育交流会」が開催され、実践報告した。また同年には、館山で「日韓歴史交流シンポジウム～四面石塔の謎をさぐる」も開催された。

こうした教育実践は市民の文化財保存運動に発展し、2004 年に教育支援とまちづくりの NPO 法人を設立した。千葉歴教協唯一の法人会員として、安房支部の活動を担ってきた。2024 年 11 月には、ハングル「四面石塔」400 年記念の奉納コンサート & 歴史シンポジウムを館山で開催した。

2. 「四面石塔」とは

館山市の仏法山大巖院にある「四面石塔」は、和風漢字・中国篆字、印度梵字、朝鮮ハングルで「南無阿弥陀仏」と刻まれた名号塔である。しかし最も注目すべきは、東面のハングルが現在使われている文字と異なる点である。15 世紀に創生された「訓民正音」の「東国正韻式」と呼ばれる初期の字体であり、100 年程度の短期間で消滅し、建立当時すでに使われていなかったという。初期ハングルが刻字された石塔は、韓国内でも存在は確認されていないというが、なぜ房総半島南端の館山に建てられたのかは謎が多い。

南面の漢字の両側には、「門門不同八万四 為滅無明果業因」「利剣即時弥陀号 一声称念罪皆

除」と刻まれている。これは導善大師撰の経文（讚偈）で、「それぞれ異なる八万四千の法門は、無明によって生じる業を消滅させるためのもの。利剣はすなわち弥陀の名号（南無阿弥陀仏）を一声唱えればみな罪が除かれる」という意味だといひ、葬儀式の回向文としても用いられる。

北面には、梵字の左側に「于時元和十年三月十四日房州山下大網村大巖院檀蓮社雄誉 < 花押 >」、右側に「寄進水向施主山村茂兵建誉超西信士栄寿信女為之逆修」と刻まれている。元和 10 年は 2 月に改元されており、3 月は寛永元年であるのだが、いずれにしても 1624 年に檀蓮社雄誉という僧侶が大巖院に建立したことがわかり、花押（図案化された本人自筆の署名）がある。

また、山村茂兵という者が施主として逆修のために水向を寄進したとある。逆修とは、死後の往生菩提を願い生前に功德を積み供養をおこなうことであり、夫婦の法名（戒名）も刻まれている。これ以外には、「四面石塔」に関する資料は何も残されていない。

雄誉とは、大巖院開山の雄誉靈巖（おうよれいがん）上人のことである。千葉の大巖寺 3 世、江戸靈巖寺の開山、京都知恩院 32 世となる高僧で、徳川家康・秀忠・家光の厚い帰依と信頼を得ている。ここで歴史背景としておさえておきたいのは、朝鮮侵略と修好（朝鮮通信使）、そして雄誉と徳川家との関係である。



「四面石塔」の刻字（現代表記）



3. 朝鮮侵略・通信使と雄誉上人

豊臣秀吉は、1592（文禄元）年から7年にわたり2度の朝鮮侵略戦争をおこなっている。日本では文禄・慶長の役、韓国では壬辰・丁酉倭乱と呼ばれる。九州名護屋を拠点に多くの武将が朝鮮へ出兵したが、東国にいた徳川家康は後方支援の立場で出兵することはなかった。

一方、雄誉は、家康の帰依を受けていた千葉大巖寺3世であったが、江戸城内での法問にて教義に関する争論に敗れたとされ、大巖寺を辞して奈良方面への巡教に出ているという。1593（文禄2）年には伏見城で家康と謁見し、大巖寺の住職を再任命され、千葉へ戻っている。

1598（慶長3）年に秀吉の死をもって朝鮮侵略は終戦となるが、日本軍は残虐な行為をしたばかりでなく、数万にのぼる朝鮮人を被虜人として日本へ連行している。大名領地での労働力にしたり、東南アジアやヨーロッパ転売された者もいた。一部の陶工や儒学者などは大名に召し抱えられ、優秀な子どもには学問をさせて僧侶や通訳などにしたという。

家康が征夷大將軍に就任した1603（慶長8）年、50歳となった雄誉は安房国主里見義康の帰依を受けて、館山に大巖院を創建している。さらに安房から上総へと活動範囲を広げ、とくに漁民や海運に従事する民衆を中心に布教しながら、次々と寺院を創建していった。

家康は朝鮮との関係修復を図り、修好を再開した。江戸時代には通算12回の朝鮮通信使が来朝するが、そのうちの3回は「回答兼刷還使」と呼ばれ、朝鮮被虜人の送還事業をおこなっている。いわゆる戦後処理である。第1回は1607（慶長12）年、第2回は家康が亡くなった翌1617（元和3）年、そして第3回は1624（寛永1）年であり、「四面石塔」建立の年に重なる。奇しくもこの年は、朝鮮侵略から三十三回忌にあたるため、「四面石塔」は戦没者の慰霊と平和祈願をこめた水向供養塔でないかと推察される。

4. 雄誉上人の西国行脚と靈巖寺・知恩院

1609（慶長14）年、雄誉は上総国の佐貫城主内藤政長から請われ、大巖院を弟子に任せて、

佐貫善昌寺（後の勝隆寺）の住職となった。1614（慶長19）年、雄誉に帰依していた安房国主里見忠義は、家康から伯耆国倉吉（鳥取県）へ改易（国替）を命じられた。この時に佐貫の内藤政長が館山城請け取りに派遣され、城破却と近辺の守備を命ぜられている。

翌1615（元和1）年、62歳になった雄誉は西国行脚（宗祖法然の霊場順拝）に出立している。時代の変わり目にあって、法然の思想や行動の原点をたどり、布教や教義のあり方を探ろうと考えたのではないかと推察される。また、家康自身も健康を害しながらも、不安な社会の人心を掌握するための宗教政策をすすめていた。そこで、民衆の信仰を集めていた雄誉へ厚い信頼を寄せていたと思われる。

西国には、檀林（僧侶の養成機関）であった千葉大巖寺で学び育った僧侶が多く、行脚中の雄誉の布教活動に大きな役割を果たしている。なお、1617（元和3）年には第2回朝鮮通信使（回答兼刷還使）が来日しており、宿坊となった寺院を訪れるなど、雄誉は使節団と直接接触した可能性も考えられる。

1619（元和5）年までの4年にわたる西国行脚では、30余寺の創建再興に尽力しており、雄誉が浄土宗布教拡大を果たした功績は大きい。



雄誉上人像



名号本尊（大巖院蔵）

西国からの帰還後も、雄誉は安房や上総で精力的に活動し、保田の別願院（鋸南町）や金谷の本覚寺（富津市）、検儀谷の大勝院（南房総市）などを創建している。

徳が高いと評判となって江戸に招かれることが増えたため、雄誉は江戸の船着き場に近い場所に草庵を結びたいと希望した。そこで、大巖院

建立にも関わった堀庄兵衛という檀那から適地を紹介された。堀についての考察は後述する。

その土地は、幕府の水軍を指揮して江戸湾の警備にあっていた旗本・向井将監忠勝の所有地であった。日本橋に近いうえに江戸湾に面した船着き場もあり、房州や上総からの便がよい地であった。さらに地続きにあった蘆原の湿地帯を埋め立てて、敷地を広げることも可能であった。雄誉は喜び、堀が交渉したところ、向井は「靈巖和尚はかねてより知る天下無双の明匠なり」と快諾したという。

1621(元和7)年に仮堂をつくり、翌1622(元和8)年には2代將軍秀忠と後に3代となる家光にお目見えして説法をおこない、葵の御紋の袈裟を賜っている。「現代の生き仏」だという評判が広まり、さらに信者は増えた。そこで幕府の許可を得て、境内を広げることとした。信者が石を持参して、念仏を唱えながら埋め立てをおこなったという。1624(元和10/寛永1)年に靈巖寺が創建され、この地は靈巖島と呼ばれた。

同じ年に「四面石塔」が建立されているが、なぜ江戸の靈巖寺ではなく館山の大巖院に建てたのかは疑問である。



『雄誉上人略伝』より(館山市立博物館蔵)

1629(寛永6)年、靈巖寺の諸堂が完成し、本尊を納めた。3万坪の敷地に120余の学寮がある大規模な檀林で、多くの僧侶が修行した。

奇しくも同年、雄誉は知恩院32世住持を任命された。浄土宗総本山であり徳川家の菩提寺でもあるが、4年後の1633(寛永10)年に大火となり、大部分が焼失してしまう。80歳の病身であったが、傷心を奮いおこして江戸に参府し、3代將軍家光に失火責任を詫びて再興を懇請した。幕府の許可を得て御影堂や伽藍・諸堂の再建に尽くすとともに、諸国に浄財を募り日本一の大梵鐘を鑄造するという大事業まで成し遂げた。

1641(寛永18)年に落慶御礼のために登城し、法談をおこない、鳩杖(宮中で80歳以上の功臣に授与)を賜ったという。しかしそのまま京都に戻ることはなく、江戸靈巖寺で念仏を唱えながら遷化した。知恩院・靈巖寺・大巖寺・大巖院などゆかりの寺院に墓がたてられ、分骨されている。なお靈巖寺は、明暦の大火で焼失し、深川に移転し今も現存している。

5. 「山村茂兵」の人物像にせまる

次に、「山村茂兵」は何者かを考えたい。安房はおろか全国に調査を広げても、この名の人物は見つからない。当時の日本人は「…へい/べえ」という名には「兵衛」「平」と記すのが多く、「兵」のみはあまり見かけない。

また、全国で「山村」という地名や人名が、朝鮮人にまつわり使われているケースも少なくない。そこで、「山村茂兵」は連行された朝鮮被虜人だと仮定してみたらどうだろうか。

「山村」夫妻は、逆修(生前供養)の儀式により「建誉超西信士」「栄寿信女」という法名を授かっている。浄土宗では、五重相伝という重要な修行を成満した念仏者が得られるのが「誉」号であるという。つまり庶民ではなく、武士に近い待遇を受けた資産家である可能性が考えられる。

また、「超西」という文字は、日本から西の海を超えたところに朝鮮があり、発音も似ている。太陽が昇ると石塔の東面に光があたり、ハンゲルが「朝、鮮やか」に輝いて見える。まったく根拠がなく、こじつけかもしれないが、様々な状況

は「山村」朝鮮人説を示唆しているように思える。

もし「山村」が日本人で、個人的な逆修供養であるなら、漢字の「南無阿弥陀仏」だけで十分であり、ハングルなど他国の文字は不要であろう。

また、四面すべてに石製の水向（水鉢）を設置したのは世界平等を表わし、「南無阿弥陀仏」と唱えて導かれる極楽浄土は平和な社会の象徴ということではないだろうか。そう考えると「山村茂兵」は、平和でない社会にいた人物、つまり戦争で苦しんだ人物ではないかと思われる。

そこで、「山村茂兵」は、この年の第3回朝鮮通信使の刷還事業で帰国することになった被虜人ではないかと推察した。「山村」夫妻は秀吉の朝鮮侵略戦争で犠牲となった数多くの同胞たちを慰霊し、平和を祈るために、自らの逆修とともに石塔の建立を願ったのではないだろうか。

逆修の儀式や水向供養塔の寄進は、社会的に成功した資産家でなければ難しいであろう。朝鮮被虜人でそのような立場になることは可能なのか。いくつかの事例を見てみたい。

6. 活躍した朝鮮被虜人のすがた

(1) 朝鮮人陶工や儒学者

山口県の萩焼の祖となった李勺光という陶工は、毛利輝元に連行されてきたが、藩より「山村」姓を賜り帰化している。山村家の伝書によると、初代は妻を娶り、2代目は山村新兵衛光政を名乗っていた。

黒田長政に連行された陶工の八山は、筑前（直方市）で高取焼をはじめた後、藩命で小堀遠州から茶陶を学び、遠州高取焼をおこしている。第3回朝鮮通信使の際に帰国を願い出たが、藩主により蟄居を命じられ帰国は叶わなかったという。

23歳の儒学者李真榮は、浅野長政によって九州名護屋へ連行され、1606（慶長11）年に帰還を希望したが叶わなかった。その後大阪で物乞いをしながら生きながらえるも重病となり、紀州の浄土宗海善寺の西誉上人（一説には朝鮮人僧侶）に助けられ仏門に入る。一度はなじまず大阪で易者をやったものの、再び西誉を頼って和歌山で寺子屋を開いた。妻を娶り、号

を一陽斎とし、紀州藩主となった家康の十男頼宣によって藩侍講として起用される。没後は子の李梅溪が17歳で侍講に取り立てられ、1655（承応4/明暦1）年の第6回朝鮮通信使の際には頼宣に随伴して江戸へ行っている。

なお『深川霊巖寺志』には西誉という名が見られ、「紀州醍醐人霊巖弟子で、慶長14年宇治五鈷山善法寺を中興」とあり、『増上寺史料集第6巻』にも「西誉」が記されている。それぞれが同一人物とは特定できないが、ほぼ同時期に雄誉の弟子として活動していたと思われる。

(2) 朝鮮人僧侶

連行後、数奇な運命をたどりながら僧侶になった者もいる。安房国の日蓮宗誕生寺18世となった日延上人は、第14代宣祖王の長男・臨海君の子であるという。父は文禄の役（壬辰倭乱）で加藤清正の捕虜になったが、王子であるために釈放され、身代わりに4歳で捕虜となり姉とともに来朝。幼くして仏門に入り15歳で受戒し、草創期の檀林で学問に励み、20代後半で誕生寺に入山、1628（寛永5）年に誕生寺管主となったという。韓国側では、臨海君の子女に関する記録が報告されていないので、今後の史料調査が期待されるという。

なお、日蓮宗のなかでも不受不施派が困窮した民衆に受け入れられていった時期、雄誉も日蓮の出身地である安房に目を向け、精力的な布教活動に取り組んでいったと思われる。

ところで京都の金戒光明寺の塔頭・西雲院を創建した宗巖は、朝鮮被虜人として姉とともに連行された宦官であったという。そのことから北政所（秀吉の正妻）に献上され、側近武将の息女に仕えたが、後に出家した。千日念仏惣回向を修めた徳の高い僧侶であったといわれる。

宗巖が受戒したのは京都知恩院29世の満誉尊照上人であり、千葉大巖寺で修学し、雄誉の兄弟子であった。また金戒光明寺26世の琴誉盛林上人も千葉大巖寺で雄誉と同輩であった。雄誉は、自らと縁の深い高僧らが朝鮮人宗巖を徳の高い僧侶に育てた姿から、戦争で拉致連行されてきた朝鮮被虜人たちに寄り添うことの大切さを学んだのではないだろうか。

7. 石塔の刻字とハングル仏典

ハングルは、朝鮮王朝の第4代世宗王が、庶民でも学びやすいようにと「訓民正音」という文字を創製し、1446年に公布した。僧侶たちも仏典をハングルに翻訳して布教していた。仏徳をたたえる詩歌の「釈譜詳節」(1447年)や「月印千江之曲」(1449年)などは、最古のハングル活字本である。

1461年に第7代王世祖によって刊経都監(仏書刊行部署)が設置され、法華経・金剛経・円覚経・永嘉経などの仏典がハングルに翻訳され、なかでも1464年発行の『仏説阿弥陀経(阿弥陀経諺解)』は1558年に双溪寺覆刻版として発刊された。ハングルと漢字が併記されたこの仏典の字体は、「四面石塔」の刻字とよく似ていると指摘されている。

『仏説阿弥陀経諺解』



朝鮮の仏典などは、室町期の日本や琉球の貿易を通じて流入し、寺院などで使われていた。秀吉の朝鮮侵略では、仏典だけでなく版木や活字なども大量に略奪しており、大名たちも手にしていた。家康は浄土宗を信仰していたが、宗派に関係なく仏教に関心が高かったため、ハングルの仏典を入手し、檀林寺院などに与えたとも考えられる。雄誉も、その経緯のなかで「四面石塔」刻字の手本とされた『阿弥陀経諺解』などを手にした可能性は高い。

2002(平成14)年に館山で開催された「日韓歴史交流シンポジウム」に登壇した韓国東国大学の張榮吉名誉教授は、「韓国内において初期ハングルが刻まれた石碑は確認されていない。館山の『四面石塔』は国宝級あるいは国際宝の価

値があるといえよう」と述べている。なお日本国内では、千葉県富津市の松翁院に類似した「四面石塔」がある。これは大巖院の「四面石塔」に影響を受けたのであろうと考えられている。



南面	東面	西面	北面
<p>正徳二年正月廿五日 檀主 印中 八良 伊野野 敬白</p> <p>重喜之 縁盛 當院 菩提寺 監</p> <p>正徳二年正月廿五日 檀主 印中 八良 伊野野 敬白</p>	<p>南無阿彌陀佛</p>	<p>南無阿彌陀佛</p>	<p>南無阿彌陀佛</p>

松翁院「四面石塔」1670年建立 (富津市指定有形文化財)

8. 江戸城築城の伊豆石と靈巖島

「四面石塔」の岩質については、千葉県教育委員会の指定文化財解説では、玄武岩とされているが、複数の専門家からは伊豆石の安山岩であろうという指摘がある。それは、高さ約2m・幅約45cmの大きな正四角柱の塔身部のことである。下部の反花座は、別の塔の部材であったものを転用した可能性もあり、材質は花崗岩ではないかという。これらのことは、今後の調査にゆだねたい。そのうえで「四面石塔」を伊豆石と仮定し、雄誉との関係を見ていくこととする。

江戸城の前身は、扇谷上杉家の家臣太田道灌が築いた平山城であった。家康は1590(天正18)年に入城して以降、江戸城の修築を繰り返していった。1604(慶長9)年には石材の採石・運搬を西国大名に命じ、10年をかけて大規模な拡張工事をおこなっている。その多くは良質な伊豆石が用いられ、おもに安山岩であったとされる。堅くて耐火性が強いことで土木や建築材、墓石などに使用された。

靈巖寺の埋立て造成地は靈巖島と呼ばれ、雄誉が上総や安房との往来に使った船着き場は、江戸の物流湊となった。資料は少ないが、江戸城築城の石置場であった可能性があるという。

靈巖島建設にも、伊豆石に関わる石丁場(採石場)の石工や、江戸湾の海上輸送(石船)の人びと、石材の管理や販売に従事する町人などが関わっていたと考えられる。

当時、江戸と伊豆を結んだ石材輸送には、3,000艘の石船（帆走船）が投入されたといわれる。江戸湾内で多数の船団が行き来していたが、台風や季節風などで海が荒れて、海難事故も多かったと思われる。

雄誉は、そうした海や河川の危険な仕事、つまり江戸湾の海上輸送や、江戸の築城・水路・埋め立てなどの工事に関わる人びと、さらには漁民などに向けた布教活動に邁進していた。

霊巖寺創建の事蹟は、雄誉の霊力を強く表す伝承となって、伝記に記されている。霊巖島の建設は、その集約的な活動といえよう。

築城において、正四角柱の石は「角石」と呼ばれ、その大きさは「四面石塔」と近い。伊豆石生産の書上帳の中には、「四面塔石」と呼ばれる石材の記載があったという。それを入手するには、かなりの人脈や資金が必要である。さらに「四面石塔」の刻字においては、高い加工技術が石工に求められたであろう。

伊豆石の研究者によれば、当時でも特別な発注があれば、伊豆で加工し、館山に直送することは可能であったとの回答を得ている。

ここで注目したいのは、霊巖島建設や霊巖寺創建に尽力した人物として、前述した「堀庄兵衛」という檀那である。檀那とは僧侶の経済的支援者を指し、どの伝記にも記載があるものの、詳細は明らかになっていない。しかし『松江藩出雲国国令』という史料のなかに「備前石場（略）山城守古町場 堀庄兵衛 那須次郎兵衛 預」というわずかな記録を発見した。

「堀庄兵衛」という人物が、「備前石場」の預り役という石材管理に従事しているのは興味深い。預け主は「山城守」とあり、松江藩堀尾山城守と思われる。江戸城普請では、伊豆石の石丁場のなかで東伊豆大川の「谷戸」と呼ばれる地域の安山岩が「堀尾」に関わっているのではないかと。現在、「堀尾」の代表紋を刻んだ刻印石が大量に見つかっているという報告がある。

これらのことから推論してみると、「堀庄兵衛」は安房出身の江戸町人であり、江戸や伊豆の海上輸送で石材に関わり、雄誉に深く帰依した資産家だったのではないかと、大胆な仮説を考え

てみた。そのために、雄誉の檀那として当初より大巖院の創建を支援し、「四面石塔」の建立にも関わったのではないかと思われる。

もうひとつの推論は、「山村茂兵」が江戸城築城や霊巖島建設に関わる朝鮮人技術者であったのではないという仮説である。そこで、石丁場の管理をしていた商人「堀庄兵衛」との交流が生まれ、親しい関係になったのかもしれない。

朝鮮被虜人「山村茂兵」は、朝鮮侵略から三十三回忌にあたり、戦没者供養を発願し、それを聞いた「堀庄兵衛」が雄誉に供養塔の建立を相談したのではないだろうか。「堀庄兵衛」はその立場上、石材「四面塔石」を入手し、伊豆で加工して館山に直接輸送するという発注が可能であったと思われる。また、檀那である「堀庄兵衛」が資金を布施した可能性も考えられる。

どのような供養塔を建てるかは、雄誉が考えたのであろう。雄誉は西国行脚において、朝鮮人僧侶宗巖の生き方に学び、被虜人に寄り添い、その思いを心に刻んでいる。「山村茂兵」夫妻の戦没者供養と平和への祈りを受けとめ、浄土信仰の世界観や人生観とともに、「四面石塔」という水向供養塔を建立したと想像する。

そして二度と隣国との戦争や拉致連行などを起こさないよう、この朝鮮侵略を忘れないために、ハンゲルを刻み、未来に伝えようと意図したのではないだろうか。

9. 大巖院の朝鮮人来訪

雄誉の没後、弟子が著した伝記が数種類現存するが、朝鮮人が大巖院を来訪したという注目すべき記載がある。

1683（天和3）年版の『霊巖和尚伝記』33巻（館山市立博物館蔵）によると、「唐人数多日本え来たり、天下の御目見し、江戸より日光え参詣し、それより直に下総上総安房三ヶ国次第に至り、名所旧跡見物せしめ、房州に至りぬれば、國中第一の大寺なれば、案内者の指図にて大巖院へ誘引す。唐人上官の人々本堂えあがり、先づ正面の額を暫く詠め、この額はなにと云ふ人の書きたるぞと尋ぬ。寺僧指し出で、これは当寺の開山、名をば霊巖和尚と申す人の筆跡なりと答ふ。

それより仏前に詣し如来を拝し、内陣の荘嚴奇麗なるをほめ、脇仏壇を見渡し和尚の影前にいたり、これは誰の影ぞと尋ぬ。これこそ開山の影像なりと答ふ。彼また如何の僧なるやと尋ぬ。その時に和尚の行状行葉具さに語りぬ。彼等皆心静かに聞きとどけ、謹んで拝をなし、現身の仏陀なりと嘆徳す。」とある。

これは、雄誉に18年間仕えていた源誉靈碩が後に記載した伝記である。雄誉の姿を伝えているが、伝承も多い。

さらに、1833(天保4)年版の『雄誉上人伝記』4巻(大巖院蔵)には、「朝鮮人来朝し、日光山拝参の序房総の旧跡見物の砌上々官上官の輩満で、当院に入額筆を嘆美し、上人の行跡を聞き謹んで影像に拝せり南無」とあり、先の伝記を底本とした可能性があるといわれている。

朝鮮人が嘆美した額というのは、宝珠様式の書体で「大巖院」と寺号が書かれた扁額のこと、今も大巖



寺号扁額(雄誉上人書)

院本堂の入口に掲げられている。裏面には1609(慶長14)年の雄誉の署名と花押があり、里見氏家臣の近藤九郎右衛門尉が寄進したことがわかる。

伝記には「四面石塔」に関する記述はない。しかし、雄誉の事績を聞き、現代のブツダのようだと嘆徳したというのは、「四面石塔」の建立経緯を知り、朝鮮人として心打たれたのではないだろうか。

いずれにせよ、日光参拝の折であるなら、1636(寛永13)年の第4回朝鮮通信使を指していると考えられる。朝鮮通信使の正史において館山はその経路に入っていない。しかし、朝鮮国王から日光東照宮に寄贈された鐘の搬送にあたり、使節団の本隊とは別に海路で運んだとすれば、館山に立ち寄っても不思議はない。

今のところほかに史料はないが、今後の調査研究によって、朝鮮通信使が館山大巖院に来たと実証された場合、近世外交史上において貴重な発見となるであろう。

10. まとめ

「四面石塔」に関する資料は、石塔面に刻まれた文字がすべてであり、ほかには存在しない。文化財としての紹介も、推論の域を出ない。

しかし、刻字されたハングルは、世界記憶遺産に登録された「訓民正音」の、「東国正韻」式という初期の字体である。しかも戦争という不幸な歴史を乗り越え、「平和の文化」を後世に伝えようとする貴重な文化遺産である。日韓両国の人びとにとって、友情の証といえる大切な国際宝である。東アジアの視点から平和友好を探求し、誇りを育む教材として活用が広がれば幸いである。また心豊かな日韓交流に貢献し、文化遺産を活かしたまちづくりがさらに進むことを祈ってやまない。

○ 参考資料：愛沢実践

<授業展開の構成>

- ・1時間目：真の国際化とは何かを考える
～ 2002年ワールドカップと日韓国民交流年
- ・2時間目：「四面石塔」をこう推定する
～ レポート作業・提出
- ・3時間目：「四面石塔」をこう見た～意見交換
- ・4-5時間目：図書室調べ学習～テーマ設定
- ・6時間目：建立の時代や仏教の年表を作る
- ・7時間目：テーマ設定の予備調査
- ・8-9時間目：図書室調べ学習～テーマ設定
- ・10時間目：愛沢作VTR視聴「四面石塔」の謎
- ・11-14時間目：図書室調べ学習～雄誉上人
- ・15時間目：調査研究ファイル作成
- ・16-18時間目：小論文作成(2,400字)
- ・19時間目：小論文と調査研究ファイル提出
(期末考査)

<千葉県立長狭高校1年生S.Aの小論文>

(1) はじめに

私は千葉県館山市の浄土宗大巖院にある千葉県指定有形文化財「四面石塔」を知り、いろいろな疑問が浮かんできた。そのなかで、私はそれぞれの面の文字の国と日本との関係や交流を知りたいと思い調べた。まず、それぞれの文字について知り、日本と関係の深い国について知ろうと思った。次に石塔に刻まれている「南無阿弥陀仏」についてどういう意味で、なぜその文字なのかということを探ることにした。

(2) 文字について

まず、それぞれの文字について知ること、日本との間に何かあるのかということ調べた。北面の文字については「悉曇(したん)」という。悉曇とはサンスクリット語の Siddham の音訳であり、サンスクリットの文字を悉曇と称している。一般的にはサンスクリット文字、専門的には悉曇として使い分けられている。悉曇学というのは、中国と日本においてサンスクリット文字においてなされた文字や音声の学問という。日本語とサンスクリットの間には、古来中国を通じて、非常に深い関係がある「南無阿弥陀仏」といった題目も本来はサンスクリットに由来している。

次に西面の文字については、漢字になる前の文字で「篆字」という。日本で使われる漢字は中国から由来してきたものである。南面の文字も日本で使われている漢字である。

そして東面の文字は朝鮮の文字で「ハングル」という。このハングルは李氏朝鮮の第4代国王世宗が1446年に公布した「訓民正音」という文字で書かれている。それは現在使用されているハングルの基となった古い文字で、短期間で消滅したため朝鮮でも近年までよくわからなかったものという。このようにそれぞれの文字から中国や朝鮮と日本が何か関係があったということがわかった。

(3) 「南無阿弥陀仏」について

四面に刻まれている文字を解説したところ、どれも「南無阿弥陀仏」という文字ということがわかった。それはお寺などで多く耳にする言葉であったので、もっとよく知ろうと調べた。「南無阿弥陀仏」という文字は「阿弥陀仏」に帰依するという意味で、中国唐代の高僧善導の解釈によれば、「南無」とは帰依を意味するサンスクリット語であり、仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願いを実現するために働く阿弥陀仏の行動を示しているという。「南無阿弥陀仏」によって、民衆の願いと仏の行動が一つになって、平和な極楽浄土で仏になることができると説いた。つまり、生命の危機や死の際に「南無阿弥陀仏」と唱えれば皆が仏になり、極楽浄土で幸せになるという。

こういうことから日本や朝鮮などが阿弥陀仏の力で皆が友好で幸せになることを願い、「南無阿弥陀仏」と刻んだのではないかと、私は推定した。

(4) 日本と朝鮮との交流 - 「朝鮮通信使」をみる

調べたなかで日本と朝鮮とはいろいろな交流があったとわかったが、さらに調べていくと、豊臣秀吉の「朝鮮侵略」が大きな意味をもっていると知った。1592年から96年の秀吉の「朝鮮侵略」は朝鮮の人々の心に日本人に対する憎しみを残した。しかし、江戸時代に入ると対馬藩や幕府の対応のなかで友好関係は回復する。これは朝鮮通信使の来日というかたちで実現したのであった。

この朝鮮通信使というのは、朝鮮国王が日本国王(将軍)に国書を渡すために派遣した使節である。はじまりは1404年に足利義満が朝鮮と対等な外交関係を結び、双方で国書を交換したときである。しかし、両国使節の友好的な往来は、1592年からの朝鮮侵略(文禄の役)と1597年の朝鮮再侵略(慶長の役)という一方的な侵略戦争で崩れてしまった。

江戸幕府は、こうした侵略戦争の後に友好関係を修復していくために、江戸時代を通じて朝鮮通信使を招くようになった。通信使は1607年から1624年までの国交回復・戦後処理のための使節が3回と、1636年から1811年までの将軍代替わりのときの使節が9回の合計12回である。最初の3回は日本からの使節に対する答礼の使節で、回答兼刷還使という。これは答礼を兼ねて、秀吉の「朝鮮侵略」のときに日本へ連行された多くの朝鮮人捕虜の返送を目的にしていた。捕虜には陶工や学者などが含まれていたが、彼らが江戸時代初期の技術・学問の発展に果たした役割は大変大きなものであった。この答礼のための使節が派遣される背景には、長年朝鮮と日本の間で交易を通じて文化交流を続けていた対馬藩の役割が重要であった。

また、記録によると通信使が途中で立ち寄りところは、日本の知識人の訪問があつたをたななかったという。当時の日本において儒学の先進国である朝鮮から学びたいという意識が高かったのだろう。このことから通信使を通じて江戸時代には朝鮮の文化が伝えられ、友好的な関係があつたことを忘れてはならない。

(5) おわりに

この石塔について調べていくうちに、たくさんの疑問が浮かんできて、何かワクワクしたような気持ちになった。今までこういうまったくわからない、資料も少ないものについて、こんなに詳しく調べたことがなかったのでかなり手こずった。

私のテーマであるこの石塔に刻まれている4つの文字は、それぞれサンスクリット(悉曇)・篆字・漢字・ハングルであることがわかったが、このなかでもハングルの文字が日本との関係が一番強いと感じ、とくにハングルや朝鮮との交流について調べてみた。その結果、16世紀末の秀吉の「朝鮮侵略」が関係しているように思えた。しかし、そのことが関係あるかどうかについては、資料もなくよくわからなかったが、調べたなかでは重要な関わりがある出来事と思った。そして、「南無阿弥陀仏」という文字は、仏に帰依して救いを求めようとする民衆の願いと仏の行動が一つになって、平和な極楽浄土で仏になることである。それが「南無阿弥陀仏」を唱えることの意味とわかった。この言葉がもし秀吉の「朝鮮侵略」と関係すれば、石塔は日本と朝鮮との友好と平和の思いを表したものかもしれないとまとめた。四面石塔を通じて日本と朝鮮の出来事を学んできたが、テーマを決めて調べるなかで、とくに両国には友好と交流の深いつながりがあったことを知った。(完)